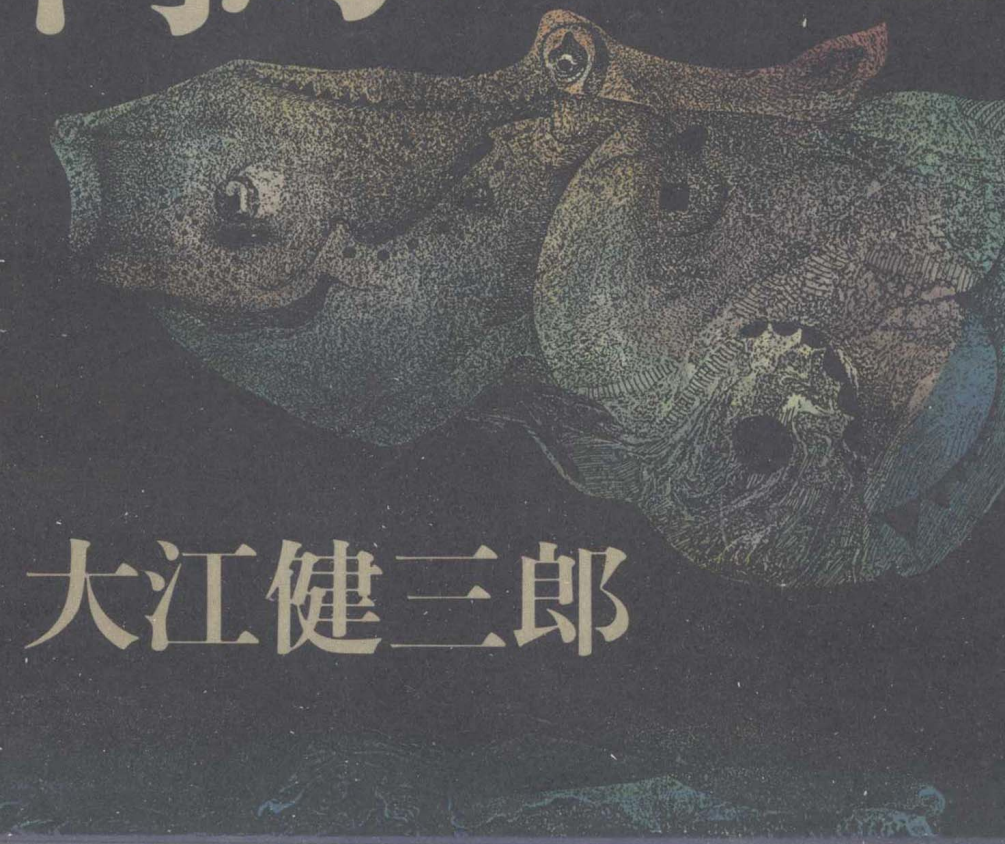
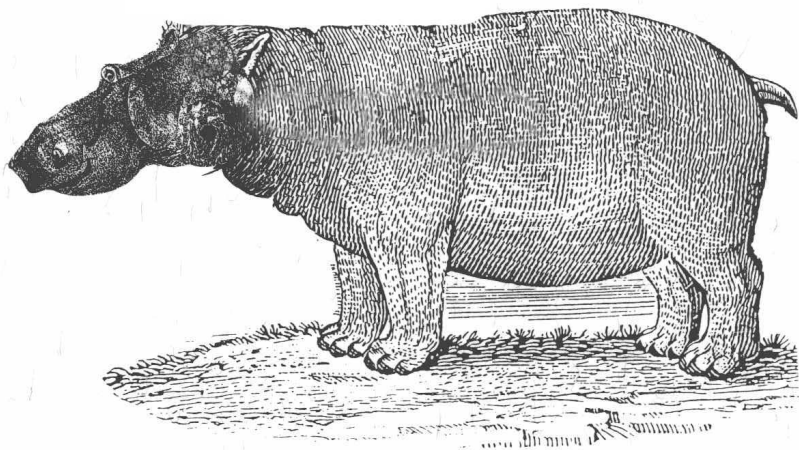


河馬に噛まれる



大江健三郎

河馬に噛まれる



文藝春秋



河馬に噛まれる
目次

河馬に噛まれる

7

「河馬の勇士」と愛らしいラベオ

29

「浅間山荘」のトリックスター

57

河馬の昇天

93

四万年前のタチアオイ

117

死に先だつ苦痛について

145

サンタクルスの「広島週間」

235

生の連鎖に働く河馬

261

裝
幀
公
司
修

河馬に噛まれる

河馬に噛まれる

ダケカンバの林にさえぎられて浅間は見えないが、噴火があると屋根に灰が降りつもる位置の、山小屋に來た。ソバにウドン、豚肉のショウガ焼き定食という種のもを出す、昔からの街道筋にある食堂で、近辺の狭い範囲にかぎられた地域に購読者を持つらしい新聞を読み、僕はある記事に引きつけられ、それに発する想像をした。想像は、およそ蓋然性^{がいぜんせい}の薄い、奇態な思いつきともいうたぐいである。しかし僕として当の想像には、内部の深いところで情緒的な強いものが呼応する。そこでどのようにして想像が、記事から触発される仕儀に到ったか、奇態だが切実な思いつきの、なりたちについて書きたい。

新聞で見つけたのは、ウガンダのマーチソン・フォールズ国立公園船着場で、日本人の青年が、若い牡の河馬に噛まれた、右肩から脇腹にかけて相当の怪我をした、という記事である。土地の新聞社の社長兼主筆が、日航の招待でヨーロッパ旅行をした。かつて自弁でアフリカまで足を伸ばし、その旅行記が一面トップに連載されているのである。河馬に噛まれたとはめずらしいし、わけても日本人の事故だからと、すでに負傷はなおりハビリティションかたがたでも

いうか、観光客用のロッジで雑用をしている青年に会いに行った。ワッ、ワッと呼んだ、というほか災難の話はしたがらなかったが、浅間の麓で新聞を出しているというのと、妙に懐かしがって、地形についてや気候のことをあれこれ聞いた。しかし言葉から、このあたりの人間でないことも確かな青年に、浅間周辺との因縁をたずねてみると、これは断乎として一切話さない。新聞に紀行を書くことをいうと、自分の名をあきらかにしてはならぬというので、現地の言葉で河馬と聞^{あだな}う勇士と綽名^{あだな}されている、その「河馬の勇士」と呼ぶと、当の物語の記事はしめくくられていた。

そして僕の想像したところは、やはり同じ匿名を用いることにするが、ウガンダで河馬に噛まれた「河馬の勇士」が、かつて僕とわずかながら関わりのあった青年で、かれのアフリカ行きには——つづまるところ国立公園の河馬に噛まれることになったいきさつにも——僕が責任の大半を問われねばならぬのではないか、ということである。

「河馬の勇士」とは直接に会ったのではなく、数度にわたって手紙の往復をし、ある動物学者の著作を送って、その本にことよせた提言を書き送った。それも十年ほど前にそういうことがあった、というのが僕とかれとの関係である。しかし「河馬の勇士」の母親とは——これも匿名にあわせ、かつて学生の頃の僕らが、彼女のことを呼びならわした仕方^{マダム}で書けば——マダム「河馬の勇士」とは、大学の教養学部^{マダム}の友人たちとともに、ある期間深くなれ親しむようであったのである。ところがつきあい^{マダム}がとぎれたまま、マダム「河馬の勇士」の世話になった友人たちがみな職につき、あるいは研究生生活をつづけて、という状態の僕らのところに、それもとくに僕を名ざし

て、マダム「河馬の勇士」が連絡してきた。当時あきらかに全日本的な事件であった大きい出来事に、マダム「河馬の勇士」の、末の息子が巻きこまれていたこと、いまある施設に收容されている息子に、文通して励ましてもらえる相手は、あの頃親しんだあなた方のほか適当な人が思いあたらぬ、あなたの住所は新聞社でわかったのだ、という話なのだった。

僕はその日のうちに、マダム「河馬の勇士」の手紙にあった連絡先へ電話をかけた。警察に追いつめられた指導者グループが起した「浅間山荘」の銃撃戦と、その背景をなす、「左派赤軍」の強化訓練の山岳ベースでのリンチ殺人の、その全体についての救援組織とはちがう場所。思想性などみじんも匂わせぬ応対の、小規模な会で、電話は個人の家にあった。そして「河馬の勇士」との文通の仕方を教えられたのである。この事件を起した「左派赤軍」のみならず武闘派の若者らの立場からは、当時僕など戦後民主主義者として、批判されるというより、むしろ嘲弄されるところにいた。しかもなお僕が、一種かりたてられるような勢いで、そのふるまいに出たのには、おもに感情的な理由があった。現に教養学部の人たちと時たま会う折、マダム「河馬の勇士」の話になることがあり、彼女に向けてのうしろめたさが、われわれに分け持たれているのを見出していた。青春を生きているという、ただそれだけの根拠で惨たらしくふるまった自分ら、という思いが、マダム「河馬の勇士」に対して、年をとるにつれて深まるようであった。その感情のいざなうまま、まだ十七歳の、したがって未成年者として、それでも大事件の関係者相応のあつかいを受けて、監禁されている「河馬の勇士」に、手紙を書いたのである。

それはほぼ次のような内容の手紙であった。あるいははじめの二、三通に書いたことにまたが

って——その間、返答はなかったから——最初の手紙として記憶されているのかもしれないのだ。自分はあなたのお母さんに、教養学部の子生活の後半、仲間たちと親切なもてなしを受けた。敗戦後十年、まだ外食券を持って食堂へ行く仕組みが残っている頃で、つまりは僕らのかような簡易食堂で、外食券を出せば主食の値段がいくらか安くなる、そういう食生活をしていた時分だった。地方出身者の寮のすぐ脇に、あなたのお母さんがひとり暮している家があり、土曜日ごとに五人のわれわれのグループが——第二外国語にフランス語をとっているということだけ共通した、進学する学部もちがっている者らだったが——常連として招かれるようになり、食事をあたえられ、わずかながら酒の類も飲ませてもらうということがあったのだ。

われわれは月曜から金曜まで交替で、あなたのお母さんに、フランス語の初歩を教えるという義務を背負って。土曜日の、みんなで食事をする際は、あなたのお母さんを啓蒙するために、つねに「文化問題」を話し合うという約束でもあった。むしろ若い不遜さのまま、文学や政治について勝手な気炎をはき、あなたのお母さんは黙って耳をかたむけるといふことだったのだ。それは一年間つづき、休暇の際と試験期をのぞけば、毎土曜日、あなたのお母さんの庇護によって、豊富な食事をしたわけだ。もし自分があなたの現在のありようにつき、文通によってなんらかの力となることができるなら、喜んでそれをしたい。そのようにして、あなたのお母さんがあたえてくれた好意のふるまいについて、お礼の心をあらわせたならありがたいと思う……

手紙に書かなかったこともあった。それはマダム「河馬の勇士」へのわれわれの漠然たるうしろめたさ、自分の青春のそなえていた惨たらしさの思いと結んでいる。われわれはマダム「河馬

の勇士」が、出発の遅い孤独な勉強を始めた動機を、本気で理解しようとはしていなかったし、彼女が自己改造する成果の見とおしも危ういものだと思っていた。第一、われわれにフランス語を教える力はなかった。そのくせ彼女の提案にわれわれは乗り、毎土曜日の夕食をせしめ、料理に注文をつける者までいたのだ。

マダム「河馬の勇士」は、戦争の間に青春を過した世代、つまりわれわれより十五、六歳年上で、戦後すぐ結婚してもいた。しかし七年間に及んだ結婚生活の間、自分の生涯はこのままでは無意味だと考えつづけ、子供が二人あったのに、離婚して夫の側に渡し、北海道から上京してきたのであった。彼女の曾祖父はクラーク博士の有名な弟子で、酪農や林檎園経営に成功し、資産はよく受けつがれて、とくに戦後すぐは東京にも事務所を出すほどに、彼女の父親が事業を発展させた。いまは開店休業に近いのらしいその事務所が、マダム「河馬の勇士」の住居で、彼女は事務所の電話番号として給料を仕送りされる身分であった。仕送りは、われわれへ土曜日ごとの夕食をふるまわせることを可能にする額だったわけだ。

マダム「河馬の勇士」は、まさに北海道開拓者の血を受けついだ、骨太の大柄な女で、クラーク博士高弟の曾祖父がモーニング姿でとった写真が、奥の居間、鏡台脇にかざってあるのを見たことがあるが、張り出した額と大きい眉に眼、しっかりした鼻という、男にしてもやや古風な、実務家として立派な容貌が、曾祖父と彼女に共通していた。しかし彼女は女であり、かつ彼女の髪の毛は——マダム「河馬の勇士」自身、父親の正式の妻でない、女中であった母親からそれを受けついだのだといっており、そのいきさつを小説に書きたいともいっていたのだが——、およ

そめずらしいほどの縮れ毛なのだった。そうしたこともあり、僕らの仲間がマダム「河馬の勇士」を女性として、それも性的な存在たる女性として受けとめるということはなかった。男性に並べているのではないが、ともかく性を超越した種類の人物と感じとる、その感情は、僕の仲間みなに分け持たれていたと思う。それでもマダム「河馬の勇士」は、醜いというのでは決してなかった。ただひとつ彼女のはっきりした輪郭の唇から、熱いものが顎へ、そして喉へとしたたったような、淡い褐色の傷あとが目立つことがあり、僕はいまでも皿に盛られたシチューが、ひとしく滴りおちているのを見ると、うしろめたさに先導される思い出の、一挙の恢復を経験する……

われわれが交替で、自分らも習いはじめたばかりのフランス語初歩をマダム「河馬の勇士」に教えたこと、そして土曜日の夕食と食後にかけて「文化問題」を話したのはのべたとおりだが、この「文化問題」という言葉は、マダム「河馬の勇士」が自分からいいたしものであるだけに、離婚したのち北海道で構想を立て、東京に出て来た、彼女の目的意識をよくあらわしている。彼女は現代のあらゆる「文化問題」に、精通することをめざしたので。そして東京大学の教養学部の学生のグループを、フランス語と「文化問題」の媒介役に採用し、そのかわり土曜の夜の夕食ときの団欒をあたえてくれたというわけだった。ありとある「文化問題」を多面的に取り込んでゆくことこそが、不毛な過し方をした戦時の娘時代の、エッセンスとしての青春を取り戻す道なのだった……

——私はスロオ・スターターだから、としばしば彼女はいったものだ。つまりはこのように、